

『クリエイティブ都市論 創造性は居心地のよい場所を求める』

リチャード・フロリダ著 (井口 典夫 訳)
ダイヤモンド社、2009年 (原著2008年)

場所に性格を見つけて

本書は、ちょっととした「引越しの勧め」である。著者は、都市には性格があると言い、個人が幸福な生活を営むためには自分の性質や価値観に沿った場所に住むことが必要であると説く。都市にはそれぞれ、寛容性、規律性……といった様々な特色があり、自分のアイデンティティに合致した場所に住むことが居心地のよい人生をもたらすと主張している。また本書は、これまでのフロリダの著作に馴染んできた人にとっては別の意味を持つ。個人が居心地のよい場所に身を置くことで、経済成長および個人の経済的成功が促される、というメッセージが暗に示されているのだ。

著者は経済成長について研究するうち、開放性や寛容性が高い都市、そして知的な職業で創造性を発揮する人が多い都市ほど活気に溢れており、経済成長が見込まれることに気づいた。フロリダの定義する創造性は、ある種の達成や価値の創造に限らず、個人が持っている潜在的な能力を生かすこと全般を指しており、必ずしも業種は関係しない。自らの才能を磨き新しいものを生み出すという点では、学者や芸術家であれサー

ビス業であれ同じだということだ。個人がその能力を発揮する割合が高いほど経済効果は上昇し、より付加価値の高い創造性を発揮した人々が経済を動かしていく——これがフロリダの前半著『クリエイティブ資本論』での考察である。『クリエイティブ資本論』が出版され10年が経った現在、彼の予見は現実のものとなった。そもそも古来より、いまいる場所にはないものを探求して、ここではないどこかへと出てゆく人は数多い。ここ横浜も、そうした人々の受け皿となってきた。現在ではグローバル企業の台頭により、優れた付加価値を生み出す技術をもった人々の仕事場は、国境をまたいであらゆる場所に移動している。

本書は、前著まで述べられてきたマクロな目線とは一味違い、個人の幸福を実現するというユニークな観点から展開されている。特に著者の在住するアメリカの都市の特色については、豊富なデータを通じて具体的に描写されている。居心地の良い場所選びの心得をあげているのも興味深い。

居場所を選びなおす

しかし現実には、すべての人が自分の行きたい場所を選べるとは限らない。ましてや

現在の日本のように、少子高齢化と晩婚化・非婚化、非正規雇用の固定化が進めば、否応なしに「いまここ」に留まり続けざるを得ない人々の数は増えてゆく。

また、日本の多くの勤め人たちは、会社と地域という2つの「居場所」に属しながら、どちらにも自分の居場所という感覚を持ちづらい状況にある。正社員の長時間労働にせよ、非正規社員のいわば「一期一会」の人間関係にせよ、望んでいたものならば健全であれ、気がつけば選択することもなくその状況に陥っていた、ということがほとんどだろう。そうなれば、会社というコミュニティへの信頼度は下がり、居心地は悪くなる。そして、雇用を社会構造の基盤にしている日本社会では、雇用から外れるまで自分がいる地域に何があるのかすら気づかないケースも多い。

田中理恵子は『平成幸福論ノート』で、母となり子育てサークルに参加し始めたことで、地域への視点が変化したと書いた。子育てする人々同士のネットワークによって、それまでは気にもとめなかつた、良い小児科や子供を預けられるお店などの存在を知り、地域への見方が変わったという。フロリダの今回の著

作はおもにアメリカを対象としており、創造性の本質についても詳しくは述べられていない。しかし、自分がいまいる場所の特色を感じ取り、そこが自分にとっていま必要なものを生み出してくれる場所かどうか、アンテナを張ること——居るにせよ、移るにせよ、あらためて「ここが私の場所だ」と選びなおし、自分に合う点を見つけてゆくこと。これこそが、よりよく生きるための創造性の端緒になりえるのではないだろうか。

もしあなたがいまいる場所に違和感があり、移動することができるなら、くよくよせずにさりと立ち去ろう。誰にだって合わない場所はある。けれど、その場所にいることを選ばざるをえないなら、どうにかして気の合う居場所にしてしまおう。まずは「いまここ」の魅力を探すことから、創造的な暮らし方が始まるのだ。

△健康福祉局医療援助課

渡邊佳奈子▽

参考文献

リチャード・フロリダ (井口 典夫 訳) 『クリエイティブ資本論』ダイヤモンド社、2008年 (原著2002年)
田中理恵子 『平成幸福論ノート』光文社、2011年